

## \***京都府青少年育成協会会長奨励賞**

### 「統一の是非」

京都府立洛北高等学校附属中学校 2年

川 本 青 汰

「経済産業省が、温泉マークなどの案内図記号を、東京オリンピック・パラリンピックに向け外国人観光客にもより分かりやすくするため、国際規格に合わせる方向で検討を始めた。」このニュースを聞いた時、衝撃を受けた。温泉マークや、触るなマークなどの、日本人が慣れ親しみ十分わかりやすいと思うマークが、外国人にわかりにくいという理由で日本人にとってはかえって不慣れでわかりにくいとさえいえるマークに変えられてしまう。このことが本当にいいことなのか強く疑問に思ったのだ。

たしかに言語によらないノンバーバルコミュニケーションとして、マークは伝わらなくては本末転倒とも言えるかもしれない。しかし、だからといって統一すればいいというものでもないと思う。マークも、特に温泉マークなどは、日本の文化や生活の一部と言っても過言ではないだろう。というのも日本は温泉の数が、他国と比べても非常に多く、お湯の中につかるという温泉の入り方も、世界でもあまり例を見ない風習だと聞いている。さらに日本人は、本当に温泉好きで、温泉をよく利用している。日本の温泉は、日本が世界に誇るべき文化・風習と言え、そのような温泉を表す日本の温泉マークも、日本の温泉文化の一部として、深く私たち日本人の心の中に根付いているのだ。こういったマークは、世界に合わせるばかりでなく日本の特徴や文化、生活の一部として尊重し、主なマークの意味と形を理解してもらい、また日本側も理解してもらうべくマークの意味を説明する情報をネットやパンフレット、ポスターなどで外国人観光客に知らせるなどして周知していくべきなのではないかと思う。

この「尊重し、理解してもらい、周知していくことが大切である」ということはほかの文化についても言えると思う。例えば、日本の文化でも、家に入る時に靴を脱いでではだしになる文化や、刺身や寿司に代表される魚の生食の文化、鉄道などがほとんど遅れることがなく定刻どおり走っていることは多くの外国人が驚く日本の文化の特徴だろう。また今年の夏に私は家族と共にグアムへ行ったのだが、そこでは、自動車は右側を通行していたし、交通標識も違った。当然ながら言語も英語で日本と違った。食文化にしても、日本人には到底食べきれないほどの量のステーキやハンバーガー、フライドポテトなどの料理に毒々しい色の薬の味がする砂糖水のような飲み物と、日本と大きく異なっていた。さらにインドでは、食事は手ですくって採るのが作法とされている。左手は不浄の手とされているため食事には絶対使わず、また握手をする際にも左手は絶対に差し出してはならない。こういったそれぞれの特色があって異なる文化は、尊重し、理解し、周知していくべきものであるということだ。

世界との付き合い方において世界中の人々にやさしいようにすることは大切だが、ただなんでも統一すれば良いというものではない。例えば言語にしても、わかりやすくするために全世界の言語を統一すればいいというものではない。言語の違い、ルールの違い、食べ物の違いなどから文化の違いを感じるのだと思う。そしてそれぞれの地域の文化に違いがあるからこそ他の文化に触れるのが楽しいのだと思う。皆さんは、まるで自分たちが住んでいる地域のコピーかのような地域に、自分たちのコピーかのような文化を持つ、自分たちのコピーかのような人々に会いに行きたいと思うだろうか。違いがなくなった世界というのは、どこへ行っても何もかも同じ、退屈な世界ではなかろうかと私は思う。

近年、ほとんどの国が欧米化されて洋服が着られ、伝統的な家は近代的な家にとってかわられようとしている。このことにより、それぞれの特色ある文化が失われてどこの国の生活も平均化されようとしているように思えてならない。そんな今、私は統一するばかりでなく、それぞれの文化とその違いを尊重していくべきだと訴えたい。

